

## 関西大学国文学会彙報

### 二、関西大学国文学会研究発表会

一、平成22年度関西大学国語国文学専修年間行事（一部予定）

平成22年6月8日(火) 二次生文楽鑑賞教室（於国立文楽劇

場）

7月17日(土) 第一回国文学会研究発表会（後掲）

10月14日(木)～15日(金) 三年次生宿泊セミナー（於飛

鳥文化研究所）

12月5日(日) 第一回プレ・スチューデント・プログ

ラム

12月18日(土) 第二回国文学会研究発表会（後掲）

平成23年1月22日(土) 第二回プレ・スチューデント・プログ

ラム

3月5日(土) 第三回プレ・スチューデント・プログ

ラム

#### ◇第一回国文学会研究発表会

日時 平成二十二年七月十七日(土) 午後二時三十分より

会場 第一学舎A三〇一教室

研究発表

「松本清張「砂の器」―台湾の訳本をめぐる諸問題―」

本学大学院博士課程後期課程 李 彦樺

「伝坊門局筆後撰集について―四季部を中心に―」

本学非常勤講師 立石 大樹

講演

「千里山に聘せられて」

木村兼葎堂顕彰会代表 水田 紀久

#### ◇第二回国文学会研究発表会

日時 平成二十二年十二月十八日(土) 午後一時三十分より

会場 第一学舎A三〇一教室

研究発表

「蕪村作「春風馬堤曲」の構造―「僕」と「我」の考察か

ら見えてくるもの―」

本学大学院博士課程前期課程 有本 雄美

(本号に論文掲載)

「近世初期俳諧の用字考証」―「當流籠拔」における「悶

立石 大樹

(イキ)る」について―

本学大学院博士課程後期課程 田中巳榮子

水田 紀久

「懐視」巻五の三「居合もだますに手なし」考―「仁政」

に対する風刺をめぐって―

日本学術振興会特別研究員 長谷あゆす

(要旨)

「お披露目の頃」

「山路の露」新出断簡をめぐって―

本学東西学術研究所非常勤研究員 中葉 芳子

関西大学に就任する、さらに十八年前、昭和三十年五月、わ

「謡曲「井筒」と平安末期における伊勢物語享受」

本学教授 山本 登朗

たくしは本学で開かれた日本近世文学会第八回春季大会の研究

発表者にはじめて名を列ねました。金子又兵衛教授司会のもと、

三、研究発表会発表要旨

その年の春そごうの即売会で入手の、頼杏坪(山陽の叔父)自

◇第一回国文学会研究発表会

研究発表

「松本清張「砂の器」―台湾の訳本をめぐる諸問題―」

(本号に論文掲載)

これはその後神田喜一郎先生が五月末の毎日新聞に、「金鉞で

も発見したような勢」でわたくしが携えて来た旨語られたしろ

もので、訳者杏坪の青年期、おそらく浪華遊学時の手すざびと

李 彦樺

て、中に漢詩のほか填詞が六関も挿まれた珍しい内容でした。

「伝坊門局筆後撰集について―四季部を中心に―」

わたくしの口頭発表を最前列で終始聴き入っておられた、瘦

身鶴のごとき山脇毅博士が降壇したわたくしにやおら近付か

れ、「只今はありがとう。ひとつ、先ほどあなたは筆者の後書、

識語をシキゴと仰有ったが、しるす、したためる場合はシが正

しく、シキは知るといふ場合の発音です」と、ご注意下さいました。

以来、わたくしは文献の識語に触れるたびに、「一般にはシキゴと申しますが……」と、この慣用語を但し書きでことわりつつ、山脇博士より頂いた一字の御指教を大切に致しております。

ちなみに、丁度本日（平成二十二年七月十七日）から京都国立博物館で開かれます歿後二百年上田秋成展に出陳の、甲賀文麗筆秋成肖像はもとこの山脇先生（平瀬家蔵河内本源氏物語の発見者）がお持ちだった逸品です。

（講演の原題は「千里山に聘せられて」でしたが、講演者自筆の要旨原稿によって改めました。）

#### ◇第二回国文学会研究発表会

##### 研究発表

◆「蕪村作「春風馬堤曲」の構造——「儂」と「我」の考察から見えてくるもの——」  
有本 雄美

#### 〈要旨〉

「春風馬堤曲」には、解明しきれないまま残されている問題が結構あるのだが、中でも自称「儂」が、途中から「我」に変わることについて、ほとんど等閑視されてきた。わずかに尾形仍氏が、「都会の客を意識して……改まった」（『俳句研究』一九八七）と指摘されているに過ぎない。もう一人、掛斐高氏がここに着眼されたのだが、結論は、何と蕪村が「混濁」したというものであった（『文学』一九九三・三「春風馬堤曲の構造」）。

しかし、私には、この使い分けこそ、この類稀な傑作詩の核心をなすものであり、そこに思いを致して詩を眺め渡してみると、詩の構造が見えてくるとさえ思われるのである。

全ての論者が誤っていて、であるが故に儂と我が無視されたかと思える重要な一点は、二人の客が、「江南語」（鳥の内の廓語）を喋っていることである。そうではない。喋っていたのは女である。蕪村の手紙にもはっきり書いてあるが、都会に馴染んだ若い婦女子は、遊女の物真似をするのがカッコイイと思いきんでいる。いつの時代でも若い子はミーハーなのである。そこを二人の客にからかわれ、女は改まったのだ。儂という見慣れない語（中国呉地方の女の自称語）で廓語を代表させたのだ。蕪村は、草稿を本稿に改める時に、ワレというル

じを態々打っている。又、僕から我への変化を訂正していない。蕪村は意識してそうしたのだ。

女がからかわれたと解釈できるのは、これも蕪村の巧みな漢語の使い方によるのである。即ち、茶店の老婆は「慇懃に」「春衣を美」めて、それとなく揶揄したことを示唆し、二客は「酒錢擲三緡」という五文字でその風体仕草を活写しつつ、「能解江南語」と口に出してからかったことを示唆するのである。ここから女は変わる。女は殊勝になり、後半の親しいの女に繋がってゆく。我への変化は、女が普通の言葉に戻したことを一字で表現したのだ。蕪村は混濁したのではない。

◆ 「近世初期俳諧の用字考証 — 『當流籠拔』における「悶（イキ）る」について」 田中巴榮子

〈要旨〉

近世初期俳諧集の『當流籠拔』に使用されている延漢字数二五〇五字の中で、振り仮名が付されている漢字には三八九字がある。この振り仮名が付される漢字の中に含まれる「悶る」は、古辞書類とはヨミが異なり、現在でも「もだえる」に対応する

漢字として定着している。そこで、この漢字「悶」と振り仮名「イキル」の結び付きに注目して、「いきる」の語の表記に「悶」を採用した意図を探っていくことを目的とする。

まず、日本と中国の辞書の記述をみる。「色葉字類抄」「類聚名義抄」「字鏡集」「倭玉篇」、中世末期から近世初期の「節用集」の「悶」の訓を調査すると、「悶」に「イキル」の訓は見えず、「節用集」では共通して、「悶」に「モダユル」の訓が記される。しかし、「饅頭屋本節用集」では「煩」に「イキル」と訓を付す例が見え、「悶」と「煩」の関係では、「合類節用集」「言字考節用集」に「悶煩」とあり、中国の辞書でも「煩」は「悶也」と記載があることから、「悶」を「いきる」と読むことが可能になる。

辞書類での考察に続いて、「悶」「煩」の俳文学作品での用法を検討してみると、「悶く」を「せく」と読ませる句が見え、「せく」と「いきる」とは意味領域が重なる部分があり、「悶る」に類似した用法といえる。また、「煩」では「煩く」と振り仮名を付す例があり、「ほめく」は「いきる」の意と通じ、「煩」を「いきる」と読むことは認められる。

しかしながら、仮名書き「もだゆる」と「いきる」の使用場面では、両者に意味的な相違があり、「悶る」は、漢字と振り

仮名で二重の映像を映し出す、新しい表現法を採用していることを結論とする。

◆ 「懐硯」巻五の三「居合もだますに手なし」考―「仁政」

に対する風刺をめぐって― 長谷あゆす

井原西鶴作「懐硯」（貞享四年刊）は、法師伴山が諸国を廻り、様々な「世の人こ、ろ」を見聞するという形式のもと、二十五の短編を収録する。

本書に関しては、かねてより、一部の章に幕府が奨励した「忠孝」への皮肉が読み取れることが指摘されていたが、近年改めて、政治的背景をふまえた読解の重要性が強調されている。すなわち、有働裕氏は、綱吉政権下の幕府が「仁政」を標榜する一方、それと反する事実を隠蔽・偽装していたことを指摘し、本書には欺瞞的な「仁政」に対峙するかのよう荒れた世の有様を描く西鶴像が見て取れるとしている。

しかし、こうした視点が示される一方、一章ごとの詳細な読みは未だ進んでいない状況にある。各章にどういった趣向があ

り、それが「仁政」とどのように関わっているのか。この点については、今後個別に説明していく必要性がある。

本発表では、その試みの一つとして巻五の三を取り上げる。本章は、尾上なる浪人が男伊達らに殺され、尾上の妹が犯人を突き止める話だが、この話について以下の点を指摘したい。

① 西鶴は最後に妹の「孝」を描くが、そこで話を終わらせず、兄の哀れな死を強調して幕を閉じている。

② 兄の殺害場面は、先行研究で指摘されていた江戸での「水野だまし討ち事件」（水野十郎左衛門による幡随院長兵衛の殺害）のみならず、備前岡山で生じた「水野だまし討ち事件」（水野定之進による安宅彦一郎の殺害）をも意識したものであり、当時知られた類似の事件を組み合わせたところにこそ、西鶴の工夫があった。

③ 二つの事件が生じた地は、仁政を志す将軍のお膝元（江戸）と、地方随一の仁政実現地（備前岡山）であった。西鶴の狙いは、単に「仁政」に反する荒れた世を描くだけでなく、本文の先に「仁政」の地で生じた実在の凶悪事件を透かし見せ、その矛盾を風刺するところにあった。

## ◆ 「山路の露」新出断簡をめぐって

中葉 芳子

## 〈要旨〉

「源氏物語」夢浮橋巻の統編を描いた「山路の露」は、あまり古写伝本に恵まれているとはいえない。今回、「山路の露」の中尾隆夫氏蔵新出断簡を調査する機会を得た。場面は、「山路の露」校本の底本である前田本の三八ウ3〜9行目に相当する。縦一四・一センチ、横一一・九センチ、一面九行詰。極札には「後花園院勾当内侍」とある。大きさ、一面の行詰、断簡の内容、筆跡などから考えて、既に紹介された三葉の「山路の露」の古筆切とツレであるといえる。

この古筆切は、伝称筆者や書写年代に関して意見の相違がみられる。しかし、結論としては、極札にある後花園院勾当内侍が活躍した室町時代初期あたりの書写とみてよいだろう。

「山路の露」の今までに紹介された古筆切の本文については、「本文系統が分かれる以前の本文、つまり古態本文のあり様を伝えていいる」とか「版本と二類本との中間的な様相を示す本文」と考えられている。

新出断簡の本文をみてみると、今までに知られていた三葉と違って明らかな独自異文は見出せず、本文の傾向としても今ま

で言われていたようなことは言えない。新出断簡だけならば、一類本の書陵部乙本（宮内庁書陵部蔵桂宮本）に一致するとと言えるのである。

それでは、これらの古筆切四葉から考えられる本文系統についてどのように考えたらよいのであろうか。四枚の断簡では判断材料に乏しいため、現時点では、一類本中の一異本と考えるのがよいかと思う。

古写本に恵まれない「山路の露」であるがゆえに、室町時代初期の書写と考えられるこれらの古筆切は、きわめて注目すべきものがあると言える。今後、さらなるツレの出現することを期待したい。

## ◆ 「謡曲「井筒」と平安末期における伊勢物語享受」

山本 登朗

## 〈要旨〉

謡曲「井筒」の作者世阿弥が、いわゆる「古注」を通して伊勢物語を理解していたことはすでに知られているが、「井筒」にはなお、古注によっては説明のつかない内容が含まれている。

すなわち、その本文が舞台として明示する「石上」の「在原寺」という地名は、これまで知られている伊勢物語古注の世界には見出すことができないのである。

天理市樺本（いちのもの）にある旧在原寺（現在は在原神社）の境内は、古くから在原業平の住居の跡とされ、また伊勢物語第二十三段の舞台となった場所であるとも伝えられてきた。この在原寺について記している、もつとも古い資料としてこれまで指摘されてきたのは、『玉葉集』（正和元年・一一三二―奏覧）に収められた、藤原為世の娘為子の一首である。

この近くには、古く柿本人麿の墓とされていた「歌塚」と呼ばれる塚がある。『清輔集』等によれば、この人麿の墓を再発見したのは藤原清輔（治承元年・一一七七没）であった。この地は本来、業平よりも人麿ゆかりの地として知られていたと考えられる。伊勢物語を中心に秘伝を述べる『玉伝深秘巻』等には、人丸と業平が実は一体であったという秘伝が語られているが、この地が人丸の墓所から業平ゆかりの地となった背景には、そのような秘伝があったのではないかと、私は考えてきた。

しかるに、平成二十二年八月の能楽学会「世阿弥忌セミナー」で、東京大学の松岡心平氏から重要なご教示をいただいた。すなわち、平安時代末の『殷富門院大輔集』等に、何人かの歌人

たちが連れだつて石上の人丸の墓を訪れ、続いて業平の住居跡にも立ち寄った時の歌が収められているのである。人丸と業平の墓や住居跡の伝承地が接近して存在し人々に知られていたことが、『玉伝深秘巻』のような秘伝が生み出されてゆく、その淵源になったとも考えられる。秘伝の成立よりも以前に、それを生み出す土壌は、このように存在していたのである。

## ◇編集後記

「関西大学国文学」第九十五号をお届けします。今回掲載の論文は国文学七編、国語学二編の計九編。留学生の論文も含め、国際色豊かな、多彩な内容になりました。

高木千恵准教授は昨年十月から大阪大学に転出されました。後任として本年四月から日高水穂先生を教授としてお迎えします。なお高木先生は来年度も非常勤講師として授業を担当されます。

来年度も研究発表会を一回開催する予定です。皆様のご来場をお待ちしています。

(朗)